

【自由研究発表第2セッション 12月6日 10:25-11:00 C会場 523教室】

植民地インドネシアのムスリムが観た第一次世界大戦後の世界

ムハマディヤ系定期刊行物 *Bintang Islam* (1923-1930) を主な資料として

小林 寧子

(東洋大学 客員研究員)

従来の研究では、植民地期のインドネシア（当時はオランダ領東インド）のムスリムが世界情勢に目を向けていたことはあまり論じられて来なかった。しかし、20世紀に入ってブミプトラ（インドネシア人）運動の隆盛とともにそれぞれの運動体から出版された機関誌や組織外の一般購読者向けの定期刊行物には海外情報も掲載されるようになった。短命に終わる定期刊行物が多かった中でも、1923年1月に創刊された *Bintang Islam*（『イスラームの星』、月2回発行、編集・発行はジョクジャカルタ）は比較的長く続いた。これは1920年代初頭から組織拡大を目指したイスラーム団体ムハマディヤの活動家が編集したもので、機関誌 *Soeara Moehammadijah*（『ムハマディヤの声』）とは別個に発行された。宗教に関するコラムもあるが、ブミプトラによる運動が隆盛する中でのムハマディヤの立場や見方を社会に発信するためのコラムが多かった。その中に変動する世界情勢を伝えるコラムも比較的大きなポジションを占めた。この *Bintang Islam* から海外情報を拾うと以下のような国際関係認識が浮かび上がる。

第一次世界大戦でオランダは中立国であったが、植民地インドネシアもかなりの影響を受けると同時に、イスラーム帝国オスマン朝が滅亡の危機に瀕するのを知って驚いた。大戦を境に世界地図が激変するのを目の当たりにし、イスラーム地域を侵食する列強の中でもイギリスの強大さに脅威を覚えた。同時に、オランダが相対的に弱小であることを認識した。オスマン朝の崩壊に伴って廃止されたカリフ制の問題に干渉するイギリスに反発を募らせるが、その超大国に抵抗する英領インドのムスリムのヒラーファト運動に対する期待を高めた。これは世界のムスリムが参集するメッカにおいて自らが低く見られているということへの裏返しという側面もあった、と言える。しかし、1926年の二つのムスリムの国際会議ではカリフ制再興への合意はならず、英領印度のムスリムに対する憧憬は冷めていった。その後1920年代末にパレスチナの状況が深刻化すると、帝国主義国に翻弄される同地のムスリムに大きな関心を向けるようになる。パレスチナへのユダヤ人移住に関しては1923年と1924年にも報じられたが、それはイギリスの政策を問題にしており、ユダヤ人に対する批判はまだ見られない。このようにして、インドネシアのムスリムはイスラーム世界で起きる変動を通して国際政治の構図を理解し、自らの立ち位置を考えをめぐらした。

【自由研究発表第2セッション 12月6日 11:05-11:40 C会場 523教室】

民主化後フィリピンの社会運動における独立活動家:

大統領診断フレームによる大規模動員

瀬名波 栄志

(京都大学 博士課程)

1986年2月のエドサ・ピープル・パワー革命後、独裁政権を打倒したことでフィリピン共和国は民主化し、「エドサ体制」を確立した。一方で先行研究は民主化後も維持されるエリート政治や腐敗を指摘し、フィリピン政治・社会の変化のなさを強調している (e.g., Teehankee & Calimbahin 2019; Timberman 1991; Thompson 2024)。しかし、社会運動に目を移すと二つの主要な社会運動である反汚職運動、親(前)大統領運動が大きな変化を遂げていることが分かる。例えば2001年においては中間層を主体としたエドサ2 (反汚職運動) と低所得者層を主体としたエドサ3 (親(前)大統領運動) が組織され、フィリピンにとってはクラシカルなテーマである階層間の境界が表面化された(日下 2013; Garrido 2017)。一方、2010年代以降では運動の性格が変化し、階層間の境界には回収されない、より複雑で新しい境界が表面化している。例えば2025年9月21日に組織された治水事業の汚職を追及する2025年9月の反汚職運動、そして2025年3月28日に組織されたドゥテルテ大統領支持運動それぞれには中間層だけでなく貧困層も参加し、階層間の境界が見た目上解消されていた。一方、反汚職運動参加者と前大統領支持者とが罵り合い、時には乱闘が発生するなどの新たな敵対性を伴う境界が生まれていることがこの研究で指摘したい大きな変化である。

この変化を説明するため、本研究は反汚職運動と親(前)大統領運動参加者への200人以上の半構造化インタビューに加え、社会運動での参加観察で収集した語りを、コーディングソフトMaxQDAを用いて分析した。

分析の結果、エドサ体制の機能不全による「独立系活動家」の出現を含む社会運動アクターの多様化と伝統的組織の衰退、組織を介さないメタコントラストフレーム(大統領診断フレームも含む)の役割の増加、そしてこのフレームによって社会運動間の「境界活性化/非活性化」(Tilly 2004)、というメカニズムを明らかにした。詳しく述べると、エリート政治や腐敗といったエドサ体制の機能不全はエドサ革命に関わった伝統的社会運動組織の権威を失墜させ、伝統的社会運動組織に所属していない無所属の活動家「独立活動家」など新しい勢力を生み出した。こうした社会運動アクターの多様化は、組織を介さずに「われわれ意識」を構築して人々をまとめあげる「メタコントラストフレーム」の役割を強化した。この集合行為フレームは集団内の差異を最小化(集団内均質化)すると同時に、外部の集団との差異を最大化する(集団間分極化)。このフレームは所属に基づく境界を非活性化し、運動内の集合的アイデンティティを強めたものの、運動外部との敵対性を増幅させ、その他の運動との境界をより活性化させた。その結果、以前に比べて2010年代の二つの社会運動間の境界はより深まっている。最後に、この境界の活性化/非活性化のジレンマがエドサ体制のジレンマに由来することについて論じる。